

第4章

特徴的な取組の紹介

児童生徒の学力を伸ばした学校の実践を紹介します。

各学校において、本章で掲載されている児童生徒の学力の伸びを引き出した効果的な取組を、今後の取組の参考としてお役立てください。
今年度は、以下の8校の取組を紹介します。

川口市立芝西小学校	東松山市立松山第一小学校
神川町立丹荘小学校	蓮田市立蓮田中央小学校
朝霞市立朝霞第五中学校	鶴ヶ島市立富士見中学校
寄居町立男衾中学校	宮代町立百間中学校



川口市立芝西小学校の取組

1 本校の概要

本校は、今年度で開校 63 周年を迎えた、児童数 646 名、学級数 21 学級、教職員数 32 名の中規模校である。学校教育目標「よく考える子 思いやりのある子 たくましい子」の下、『「元気」「笑顔」「やる気』いっぱいの芝西小学校～子どもと教師が生き生きと輝き、保護者・地域に信頼される安心・安全な学校～』を目指す学校像とし、知・徳・体のバランスのとれた教育活動を実践している。



本校では、「主体的に運動し、『元気』『笑顔』『やる気』に満ちあふれる芝西っ子の育成～『できた！』『楽しい！』を味わわせる体育授業～」を研究主題とし、体力向上に取り組んでいる。その中で、グループ学習やペア・トリオ学習での伝え合いを通して思考力・判断力・表現力の育成も目指している。

2 令和6・7年度の結果

小学校4年生→小学校5年生の取組【算数】

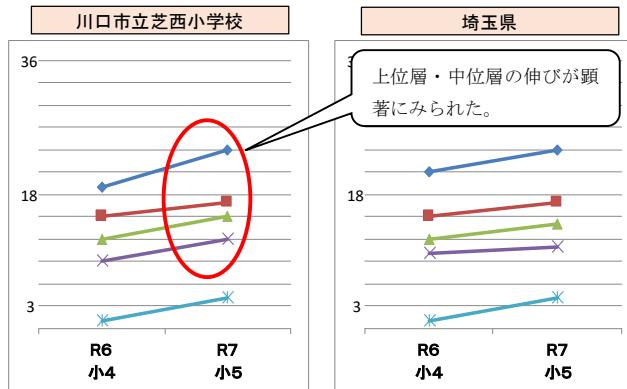
(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



県平均より伸びが大きく、
5年時は県平均を上回った。

学力の伸びの状況



上位層・中位層の伸びが顕著にみられた。

(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア ICTの積極的な活用

算数では、考えを共有したり図形領域で視覚的に支援したりと ICT を積極的に活用した授業を実践している。また、他教科（理科等）において、紙のノートを使用せず GIGAスクール端末をノートとして学習を進めたり、習熟を図る際は児童に適用問題を選択させて取り組んだりしている。高学年においては、GIGAスクール端末で単元テストを実施する等、児童教師共に ICT 技能を高めながら学力を伸ばす取組を行っている。



〈1単元分のタブレットノート〉

イ GIGAスクール端末を活用した算数問題「川口Sネクスト」への取組

川口市では、5・6年を対象として「川口Sネクスト」を実施している。算数の学力定着状況を実感・把握することを目的とした取組で、年に2回実施している。予想平均点が低めに設定され発展的な問題も含まれており、実施後、正答が即時判定されるため、児童がすぐに確認し、復習することができ、それにより学力の定着につながっている。



〈Sネクスト保護者通知〉

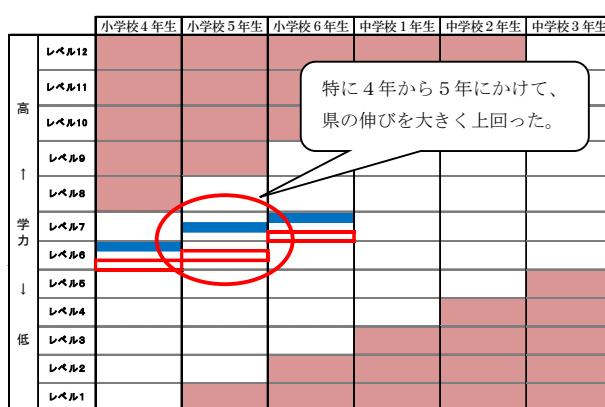
ウ 授業（学習形態）の工夫の取組

単元によって習熟度別少人数指導やチームティーチングを行ったり、適用問題時に早く解き終えた児童が「ミニ先生」として教え合いを行ったりすることで、効果的に学力を高めている。

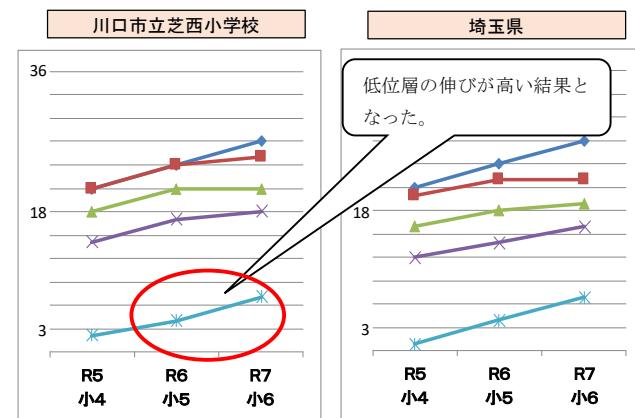
小学校5年生→小学校6年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 思考ツールを活用した国語授業

叙述から気持ち・行動を読み取った後に心情曲線を用いて登場人物の心情の変化や登場人物同士の関わりをより深く理解できるようにしたり、ICTを用いて言葉を色分けし整理してから文章を書いたりする等、様々な思考ツールを用いて授業を実施している。その際は、学年で単元前に教材研究を行い、昨年度との見直しを図りながら、教材を共有化して授業を進めている。

イ 他教科における「思考力、判断力、表現力等」の育成

体育の授業では、ゲーム中に記載させた技能分析表を基にチーム内で課題や作戦の話合いを活発化させたり、個人活動になりがちな跳び箱やマット運動においてもトリオ・ペアでアドバイスし合う活動を重視したりすることにより、自分の考えを伝える力を高めている。



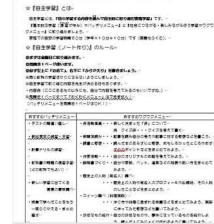
〈体育の授業での伝え合い〉

ウ 朝学習の効果的な取組

本校では1校時前に、朝学習（15分）を実施しているが、週に1度は、全校で共通の取組内容を実施している。国語タイムでは、「コバトンのびのびシート」「硬筆」「読書」「タブレットを用いた発展問題」等、時期や学年に合わせて短時間で効果的な内容を考え取り組んでいる。

エ 家庭学習の内容の充実

3年生以上は、国語、算数、音読を中心とした基本の宿題に加えて「自主学習のすすめ」を家庭に周知し、児童の自主性や意欲を高めた学習を行っている。



〈自主学習のすすめ〉

学校全体での取組

(1) 共通理解を図った教科指導・教員同士での授業参観

国語や算数に加え、体育や学級活動等、年度当初に職員全体で授業の進め方を確認し、共通理解の下、進めている。また、校内の研究授業に留まらず、示範授業や管理職参観授業等を自由に参観できる体制を作り、お互いに見合って授業力を高めている。

(2) 学力に関する職員研修と家庭への啓発

毎年の夏季研修では、全職員で県学力・学習状況調査の結果の伸びや課題を分析し、学校で力を入れて取り組んでいく内容や家庭で取り組むことのできる学習内容を話し合っている。また、整理した内容を家庭にも配信し、学校・家庭で協力して学力を高める環境を整えている。

(3) CBT化を見据えたタイピングソフトの導入

令和5年度より、校内でタイピングソフトを選定し、学校全体で級認定を掲示したり、毎年取り組むソフトを変更したりすることで、継続的にタイピング技能を高めている。



東松山市立松山第一小学校の取組

1 本校の概要

本校は、明治6年8月6日に開校し、本年度で152年目を迎えた。東松山市の中心部に位置し、周辺には上沼公園、下沼公園、岩鼻運動場などの自然豊かな公園、そして箭弓神社などの文化的財産、陣屋通り商店街も近くにあり、よい環境の中で教育活動を行っている。学校教育目標は「なかよく かしこく たくましく」とし、知・徳・体をバランスよく育むことを目指し、この実現に向け、教職員一同力を合わせ、日々の教育活動に取り組んでいる。



2 令和6・7年度の結果

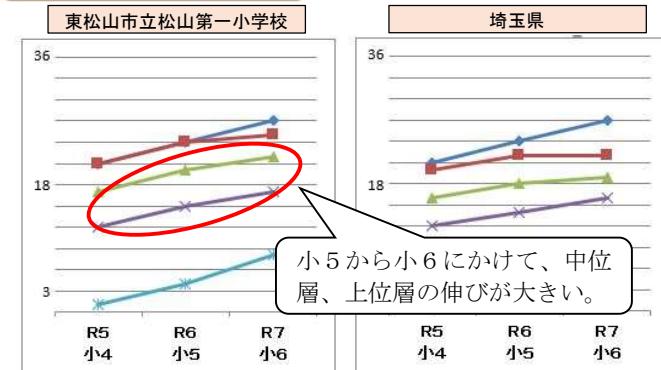
小学校5年生→小学校6年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 学校課題研究を通した校内での共通実践

令和4年度から令和6年度の3年間で、「国語科の読解力を育成する指導の工夫」という研究主題を掲げ、国語科の授業改善の研究・実践に取り組んだ。課題解決型の授業、課題とまとめの正対、叙述に即した読み取り、文章を書く力を高めるための指導法など、年次ごとにテーマを決めて取り組んだ。また、中・高学年では、1単位時間の授業展開を統一して取り組み、授業担当者が変わっても、児童が同じ進め方で学べる環境を整えた。



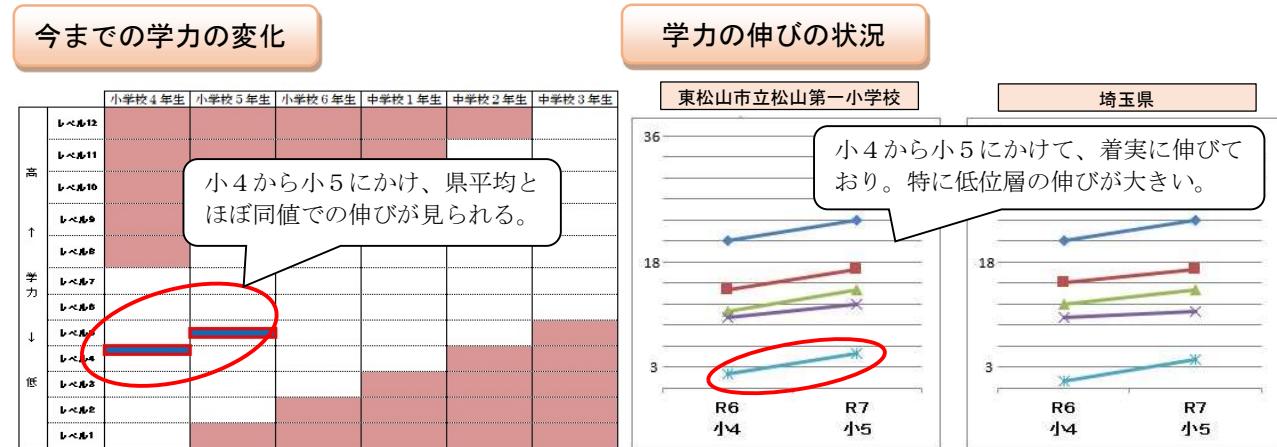
イ 学習方略や非認知能力に関するこ

全校で「コツコツカード」を活用し、家庭学習の習慣化に取り組んでいる。カードの内容は国語の音読に関する項目として「大きな声ではっきりと」「句読点に気をつけて」の2つを設定している。その他に「体力」として、運動面の課題や「宿題」も項目に入れ、課題や宿題などを継続的に行う習慣化を図り、家庭と連携しながら児童に「粘り強く取り組む」力の育成を図っている。



小学校4年生→小学校5年生の取組【算数】

(1) 学力の伸びから見られる特徴



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 少人数の習熟度別指導の導入と全校で統一した授業展開

令和4年度より算数で少人数の習熟度別指導を導入した。3～6学年は教科担任（授業者A）と学級担任（授業者B）で時間割をそろえ、Aが中上位の児童を担当し、Bがその他の児童を担当した。Bのクラスは単元の初めに既習事項の復習を多めに設定し、Aのクラスは、単元の終わりに応用問題や発展問題に取り組んだ。また、授業展開を統一し、学年や指導者が変わっても、同じ授業の流れにすることで、児童が安心して、学習に取り組むことができるようになった。

イ 学習方略や非認知能力に関するこ

児童が学習サイクルを身に付け、学習の見通しがもてるよう、単元の流れを（予習・授業・復習・テスト・復習）という形で統一し、全校で取り組んだ。

また、少人数の習熟度別指導では、授業展開を工夫し、できない問題を繰り返し行い、定着を図った。児童にも粘り強く問題を解くという習慣が身に付いた。



学校全体での取組

(1) 特別活動を通した学級経営と人間関係の構築

年度当初に、オンラインによる「年度当初の学級経営」についての講義を聞き、また、本市で作成した「東松山の学級経営スタンダードver2.0」を活用し、児童が安心して学習できる学級づくりに全校で取り組んでいる。この取組が、児童の積極的な授業態度にもつながっている。



(2) 朝読書の活動の取組

業前の時間を活用し、全校で朝読書を行っている。各自が用意した本をじっくりと読むことで、読書の習慣化と落ち着いた教室の雰囲気づくりができるており、各教科の授業にも落ち着いて取り組むことができる一つのきっかけとなっている。





神川町立丹莊小学校の取組

1 本校の概要

本校は、埼玉県北部に位置する、開校 152 周年を迎える学校である。全校児童は 296 人、学級数 17 の中規模校である。

学校教育目標「『笑顔いっぱい・夢いっぱい』自ら学び、思いやりの心を持ち、たくましく生きる児童の育成」の下、全教職員が一丸となって教育活動に取り組んでいる。今年度は、「学び合い、認め合い、主体的に高め合う教育活動の推進～探究的な学びと児童理解の視点に立った、国語科指導の研究～」を研究主題に、主に国語科を中心に、授業を通して学力の向上を推進している。



2 令和6・7年度の結果

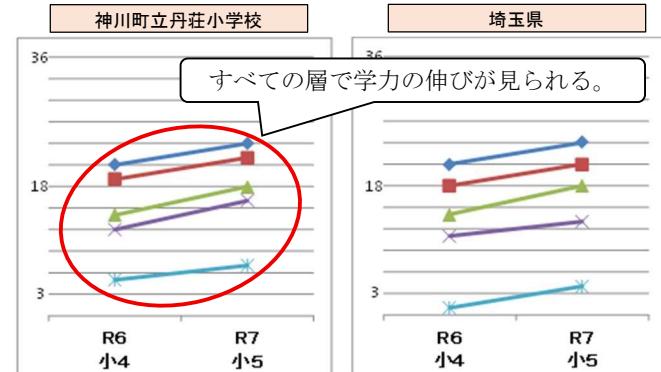
小学校4年生→小学校5年生の取組

(1) 学力の伸びから見られる特徴【国語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 毎時間の授業において子供と先生で学習課題を設定【神川町探究型授業の充実】

①子供が解決しようと思えるようなものであること②少し高めのハードルであること③何を解決すればよいのかがわかりやすいものであること等を意識しながら学習課題を設定している。

イ 学年の実態に応じた業前学習の充実

毎週月曜日の業前学習で1・2・3年生は視写学習、4年生は新聞ワークシートを活用しての記述問題、5・6年生は朝日小学生新聞を活用してのコラム学習に取り組み、書く力の育成を図っている。毎週金曜日には、新出漢字、漢字テスト、言語学習等、その時期に応じて内容を弾力的に変更しながら国語の基礎・基本の習得を図っている。

ウ 学習の系統性を生かした掲示物の充実

1年間で約3回程度ある説明文の学習に利用できる掲示物を作成した。文章の構成を考えたり、学習用語を振り返ったりすることで、国語科の基礎・基本となる知識や学習の仕方の習得を図っている。



学習の系統性を生かした掲示

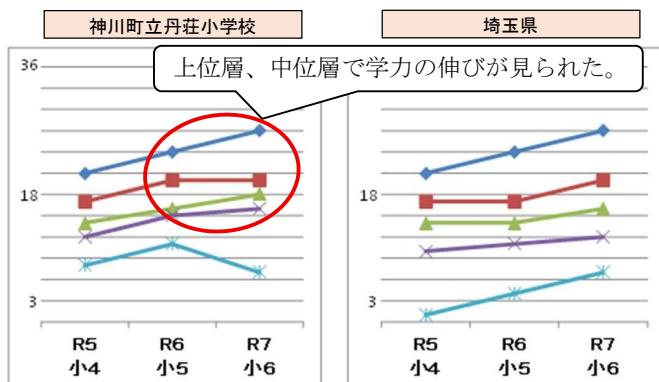
小学校5年生→小学校6年生の取組

(1) 学力の伸びから見られる特徴【算数】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 子供相互の対話(話し合い・討論)を生かしながらの課題解決【神川町探究型授業の充実】

①自力解決②グループでの学び合い（ユニット）③学級全体での学び合いの流れの学習スタイルを確立している。教師は、自力解決の時間にうまく仮説をもてないでいる子供を丁寧に支援している。授業の前に、子供たちから出されるであろう意見（仮説・見方）を多様に予想しておき、どのように話し合い・討論をリードしていくかを計画している。

イ 県学調復習シート（算数）の活用・家庭学習との連携

毎週金曜日に県学調復習シートを配布し家庭学習で取り組む。月曜日に回収し、火曜日の業前学習で答え合わせ、復習を行い、学習の定着を図っている。

ウ ベーシックサマースクール・ビルドアップ教室

夏休み中に、2～6年生を対象とした算数の補習授業を行っている。また、2・3学期の放課後に4・5年生を対象とした算数の補習授業を行っている。どちらの取組も算数における低位児童の基礎・基本の定着を図っている。



ベーシックサマースクール

学校全体での取組

(1) 構造的な板書の作成

作品や文章から読みとった意味や概念、またそれらのつながり・関係を、子供の発言を生かしながら俯瞰できるように授業1時間を黒板1枚分で構造化している。

(2) 職員フリー参観

職員が自由に教室を出入りし、授業を見合い、良いところを共有する。若手、中堅、ベテランがそれぞれの授業を見合うことで、互いの良さを実感したり、指導に活かしたりすることができるようにする。

(3) 各種学力テスト分析

全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査の結果を受け、職員研修で分析する時間を設けている。全国学力・学習状況調査については、職員全員で当年度の問題を解いた後、どんな傾向の問題が出ているのか、児童がつまずきそうな問題はどのような問題なのか等を、ICTを活用しながら同時編集、同時入力、即時フィードバックしながら進めている。埼玉県学力・学習状況調査では、昨年度からの伸びを参考に、前学年や前担任の取組を共有したり、非認知能力の高まりについて分析したりしている。

(4) 神川町教育委員会の方針で受けた学校研究の実施

神川町教育委員会の学力向上の方針を受け、教師による助言の仕方や児童理解に基づいた授業づくりを学校研究に位置づけ、実施している。同方針は神川町内の小中学校でも実施しており、小中連携の取組になっている。



蓮田市立蓮田中央小学校の取組

1 本校の概要

本校は全校児童 530 名、通常学級 18 クラス、特別支援学級 2 クラスの中規模校である。昭和 44 年に開校し、今年で 56 周年を迎えた。

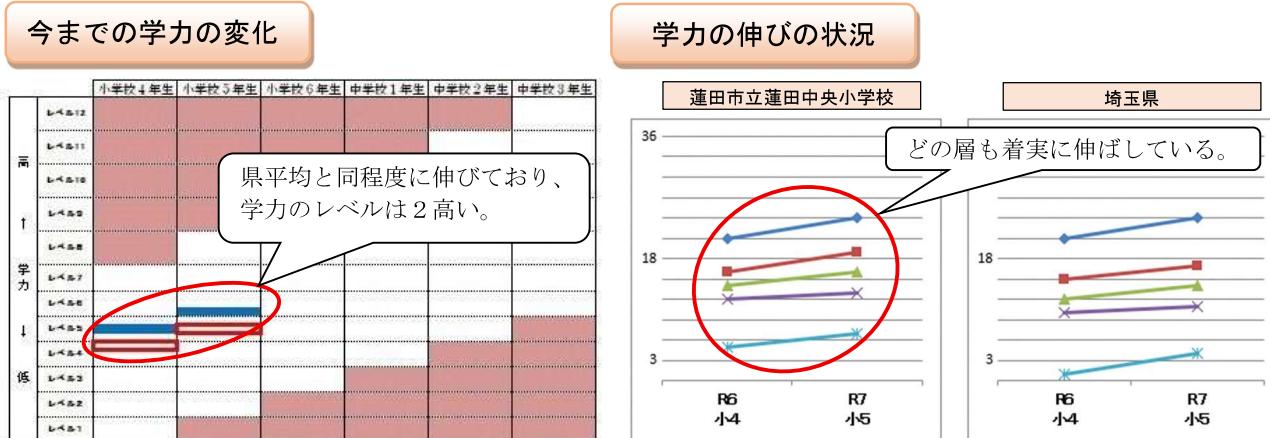
本校は目指す学校像を「子供の笑顔輝く未来のために、教職員が創意工夫し、家庭・地域と協働する元気な学校」とし、学校教育目標「心豊かにたくましく未来を拓く児童の育成～よく考える子・心豊かな子・じょうぶな子～」の実現に向け、子供の笑顔輝く未来のために教職員が創意工夫し、家庭・地域と協働する元気な学校づくりを進めている。



2 令和 6・7 年度の結果

小学校 4 年生→小学校 5 年生の取組【算数】

(1) 学力の伸びから見られる特徴



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 算数タイムでの復習

朝の活動の一つである「算数タイム」では復習に力を入れた。系統を意識し、現在学習している内容に関連する前年度の内容などにプリントで取り組むようにした。例えば、4 年生の小数のわり算の学習では、3 年生で学習した小数やわり算の復習を行った。また、コバトン問題集やタブレット端末を使ってオンラインドリルに取り組んだ。習熟が不十分だった部分を解消した上で学習することにより、学力向上につながった。



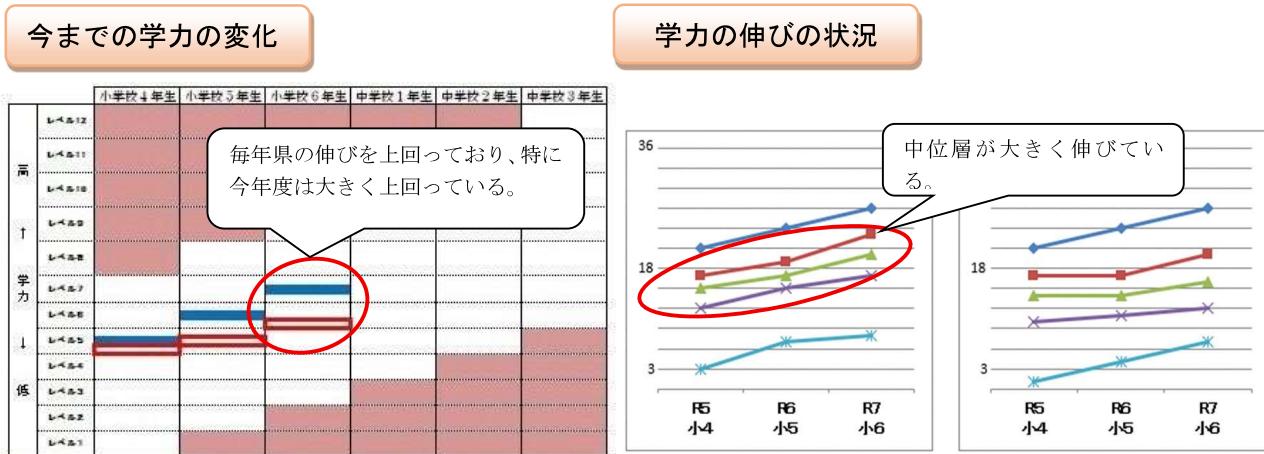
イ 学習方略や非認知能力に関するこ

学級活動の時間に「いいねマンダラート」を実施した。各班で話し合ってカードにまとめた長所について、それぞれが読み、感想を書くことで、自分自身の長所に改めて気付くことができ、自己肯定感が高まった。また、インタビュー活動を通して友達の良さを見つけようという意識も高まった。クラス全体にお互いを尊重し認め合おうとする支持的風土が醸成された。



小学校5年生→小学校6年生の取組【算数】

(1) 学力の伸びから見られる特徴



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 既習事項の着実な定着

授業で学習した内容が確実に定着するよう、その日のうちにドリルやプリントで復習を行った。また、学び合いを重視し、友達に対して自分の考えを自分の言葉で説明する時間を確保した。これらの取組の結果、学習内容の理解が深まり、考え方も広がって、学力向上につながった。



イ 学習方略や非認知能力に関するこ

感謝やお礼の気持ちを書き出し、教室内に掲示した「ありがとうの木」に貼り貯め、児童が休み時間などいつでも見られるようにした。また、道徳の時間で取り上げたり、帰りの会で日直がクラスの友達の良いところを発表する時間も設けたりした。その結果、クラス全体で互いに認め合おうという温かい雰囲気ができ、支持的風土が醸成された。



学校全体での取組

(1) I C T の活用場面における期待する効果と活用ポイントの明確化

I C T を活用するとどのような効果が期待できるかを考え、活用場面を7つに分類した。また、7つの場面それぞれにおいて活用のポイントを明確化し、意図的・計画的な授業を構成するようにした。また、教科書の二次元コードコンテンツ等も学年ごとに整理し、いつも活用できるようにした。

具体的な方策 (ICTの活用場面)

- ・問題提示…問題を一瞬で配布できる。問題を拡大して見せることができる。
- ・自力解決時…ノート、ワークシートの代わりに使用できる。試行錯誤が可能である。
- ・学び合い時…一瞬で記述内容が転送できる。また、一覧表示が可能である。
- ・まとめ・振り返り…まとめ・振り返りの共有ができる。振り返りの蓄積が可能である。
- ・学習内容の蓄積…タブレットに書いた内容が蓄積される。
- ・個人の状況の把握…個人の問題解決状況を把握できる。
- ・知識・技能の伝達…お手本の動きを確認したり、自分の動きを振り返ったりすることができる。

(2) 一人一人の理解を深めるための思考の場面における「対話」の重点化

児童の協働的な学びを推進するために対話が重要であると考え、対話とはどのようなものかや、どのような意図によって行うかを定義付けた。また、低・中・高のブロックごとに「学び合う姿」を設定した。さらに、学び合いが効果的に行われるよう、「中央小☆発表のルール」や「中央小対話の仕方」、「対話タイム」などの「対話的な学習の仕方」を作成し、活用した。



朝霞市立朝霞第五中学校の取組

1 本校の概要

本校は、緑と川に囲まれ自然環境に恵まれた学校である。本年度創立47年目をむかえた。生徒数は319名、学級数11学級（通常学級9、特別支援学級2）である。生徒は、本校の伝統である「あいさつする」「掃除をよくやる」「規律を守る」などを引き継ぎ、何事も一生懸命取り組む学級風土の下、学級・学年を問わず互いに認め合う雰囲気が根づき、落ち着いた学校生活を送っている。

2 令和6・7年度の結果

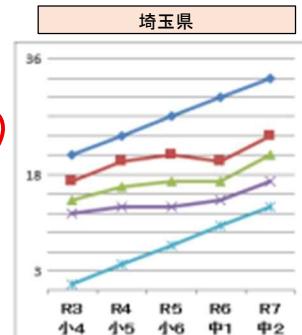
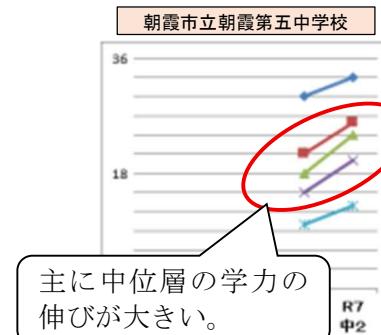
中学校1年生→中学校2年生の取組【数学】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



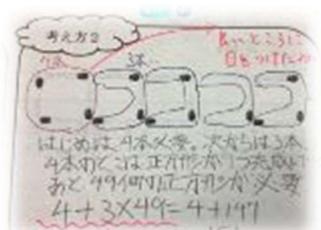
(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 習熟度別指導による個に応じた学びの充実

昨年度、本校では中学1年数学において習熟度別指導を実施した。学級内の学力傾向を分析し、二つのグループに分けて授業を行うことで、生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導を可能とした。特に、学力下位層のグループについては10名の少人数とし、教員2名による協働指導体制を整えた。授業では基礎・基本の確実な定着を重視し、反復演習を通して理解の定着を図った。その結果、学力の底上げが見られるとともに、学習に対する自信や自己肯定感の向上にもつながった。



【数学教室の掲示物の工夫】



【授業支援ツールの活用】

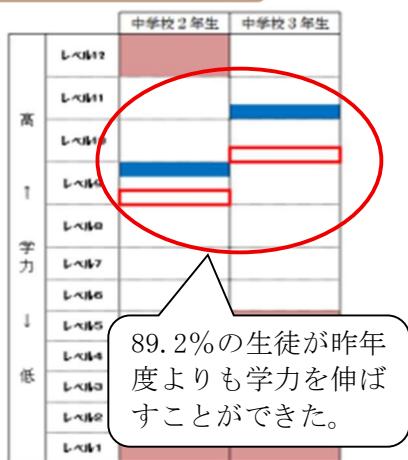
イ ICTを活用した自立的な学びの推進

授業支援ツール（ロイロノート）を用いて自分の考えを共有し、他者の意見との比較を通して多面的に思考する力を養った。また、AIドリル（すららドリル）により、個々の理解度に応じた課題に取り組むことで、学習習慣の定着と自己調整力の向上を促した。さらに、オンラインアンケートツール（Microsoft Forms）を活用して単元ごとに小テスト（単元別テスト）を実施し、学習状況の見える化と即時のフィードバックを行った。これにより、生徒自身が自らの課題を把握し、次の学習に生かす姿勢が定着した。これらの取組により、生徒は自ら課題を見つけ、粘り強く取り組む姿勢を身に付けた。学習意欲や自己肯定感の向上も見られ、学力の定着と主体的な学びの両面で成果が得られた。

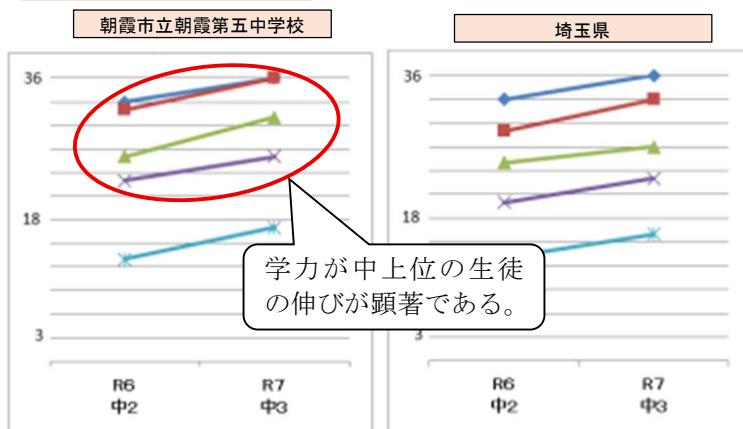
中学校2年生→中学校3年生の取組【英語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



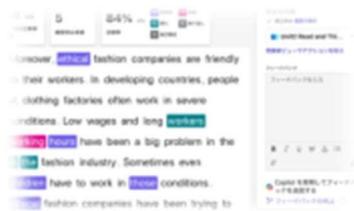
学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア コラボレーションツール (Microsoft Teams 課題機能を活用した音読練習の取組)

英語の「読む力」「聞く力」の向上を目的に、コラボレーションツールの課題機能を使った音読練習を実施した。生徒は自宅でタブレット端末(iPad)を用いて音読し、録音データを提出。AI機能により発音ミスや読解速度(WPM)が可視化され、自分の上達を数値で確認できるようにした。これにより、苦手意識をもつ生徒も繰り返し練習に取り組むようになり、発音・読解・リスニング力の向上につながった。ICTを活用した個別最適な学びの実践として効果が見られた。



【コラボレーションツールの課題機能の活用】

イ 授業支援ツール（ロイロノート）や自己評価シートを活用した英作文の取組

英語の表現力を高めるために、授業支援ツールや自己評価シートを活用した英作文の取組を行っている。生徒は授業で新しく習った文法や表現を使い、2~3文程度の短い英作文を作成し、授業内または宿題として授業支援ツールに提出している。教師は提出された英作文を確認し、生徒が誤りやすい文法・語彙のポイントを把握したうえで、次の授業で全体にフィードバックを行う。特に、生徒の実際の英文を共有しながら解説することで、同じ表現を使った新しい例文に触れる機会が増え、表現の幅が着実に広がっている。

学校全体での取組

本校は、朝霞市より特認校の指定を受けており、特色ある教育活動の一環として、学習支援体制の充実を図っている。具体的には、土曜日の午前を中心に年30回程度「ステップアップ教室」を実施し、学校の教室を開放して希望する生徒に自主学習の場を提供している。教員も複数名体制で参加し、生徒からの質問対応や学習支援を行うことで、基礎学力の定着と学習習慣の確立に効果を上げている。また、月2回程度、水曜日の放課後には「チャレンジ学習」を実施し、学年ごとに設定したテーマに基づいて全生徒が課題に取り組んでいる。生徒一人一人が自ら学ぶ力を高めるとともに、主体的に課題に向き合い、粘り強く学びを継続する姿勢の育成を図っている。



鶴ヶ島市立富士見中学校の取組

1 本校の概要

本校は、特別支援学級2学級を含む9学級、生徒数235名の中規模の学校である。

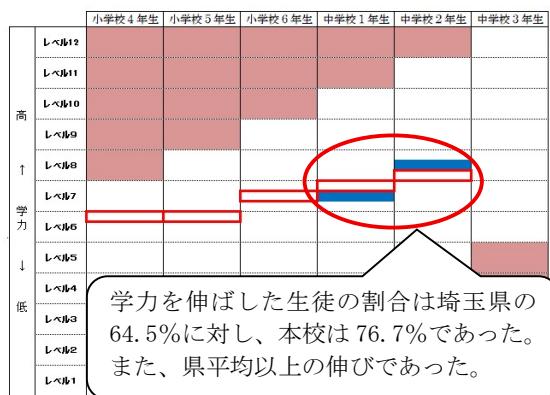
学校教育目標を「心を磨き」「本気で学び」「たくましく」とし、目指す生徒像を「豊かな未来を創り出す生徒」としている。これらを具現化するために、「一人残らず学ぶ教室」を合言葉にし、授業力向上に向けて研修を進めている。

2 令和6・7年度の結果

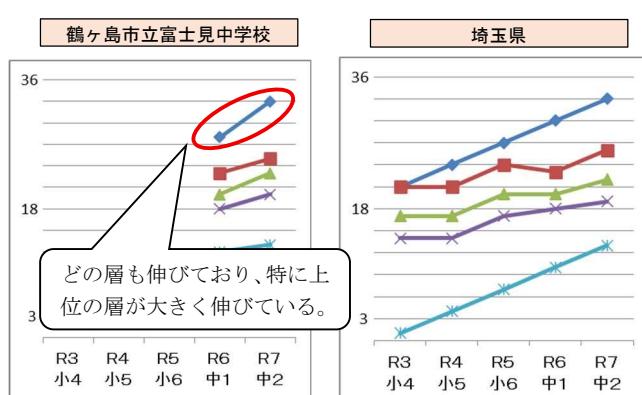
中学校1年生→中学校2年生の取組【国語】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 個別進度学習（自由進度学習）

令和6年度の2学期後半以降、生徒は教師から示された課題に対して、どの順番で課題に取り組むかを計画し、その計画に沿って学びを進めている。自分の学びを深めたい課題や苦手意識のある課題については時間をかけることができ、一方で得意な課題については短い時間で学びを進めることができる学習方法である。この学習方法で学ぶ中で生徒は、教科の学びだけでなく、どの教科にも通じる「学び方」も学ぶことができる。結果として、「個別進度学習」が「学びに向かう力」の育成に寄与していると考えている。

（左：個別進度学習用サイト）
（右：学習の様子）



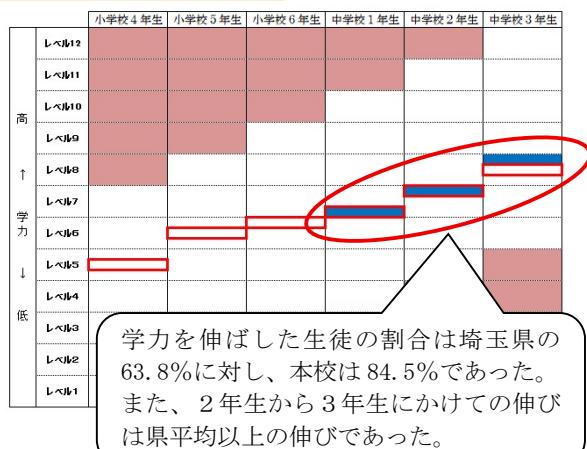
イ 学習方略や非認知能力に関するこ

「個別進度学習」の取組の中で生徒自身が学習計画を立てながら学習をしていることもあり、「プランニング方略」は県平均以上の数値となっている。また、自らの計画を進めていくことが求められるため「作業方略」も県平均以上になっている。その他にも、進度は様々であっても学級内での学び合いを求める学習形式にしているため、他者とのかかわりの中で自分の考えを形成していく必要がある授業となっている。その結果、「柔軟的方略」「認知的方略」「向社会性」の数値も県平均以上の数値になっているのではないかと考えられる。

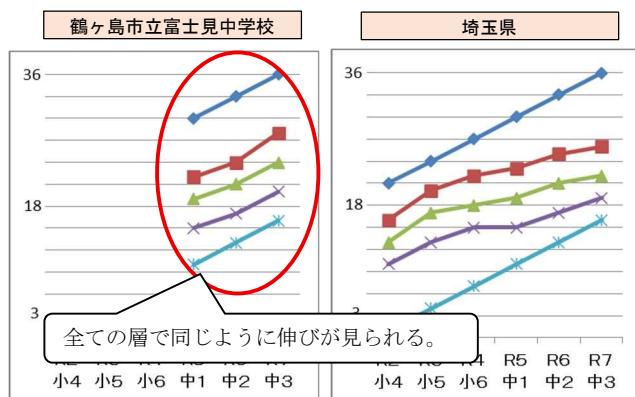
中学校2年生→中学校3年生の取組【数学】

(1) 学力の伸びから見られる特徴

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 「対話」を中心とした授業

授業の中で教師が「指導する時間」よりも、生徒同士の「対話による学びの時間」を多く確保することによって、主体的・対話的で深い学びとなる「学び合い学習」を実施している。さらに、生徒の学習成果に対しては、「正解」という結果より「なぜそのように考えたのか」という過程を重視することで、学びを深めている。このように、生徒同士の対話と、生徒と教師の対話を中心とした授業を実践している。

イ 学習方略や非認知能力に関するここと

他者との対話によって、自分の考え方と異なる意見を踏まえながら学びを進める場面を多く設定している。いろいろな考え方を受け入れながら学ぶことで「柔軟的方略」の数値が高まり、また授業の中で自分の説明を相手に聞いてもらう機会を設けることで「自己効力感」の数値が高まり、いずれも県平均以上という結果につながっているのではないかと分析している。

学校全体での取組

(1) 「学び合い学習」を通じた「一人残らず学ぶ教室」

「学び合い学習」によって、すべての生徒が多くの考え方方に触れながら自身の考えを形成していくことができる授業づくりを目指している。

(2) 生徒の活動時間の確保（授業の6割以上を生徒の活動時間に）

全教職員が共通理解の上、どの教科の授業においても生徒の活動時間を確保することで、生徒が自ら考え、学ぶことができる授業づくりに努めている。

(3) 鶴ヶ島市「『主体的・対話的で深い学び』チェックリスト」の活用

鶴ヶ島市学力向上推進委員会が作成した、「『主体的・対話的で深い学び』チェックリスト」を活用し、生徒も教師も同じ観点で授業を振り返る取組を行っている。教師が自身を振り返るだけでなく、生徒がどのように感じているのかを知り、生徒が主体的に学ぶことができる授業づくりに役立てている。

(4) 学習支援員の活用

鶴ヶ島市では、中学校に各1名の学習支援員の配置をしている。本校は、数学科に支援員の配置を行っており、教科担当に加え支援員の補助により、きめ細やかな指導ができる。



寄居町立男衾中学校の取組

1 本校の概要

本校は、昭和22年の開校以来、今年で79年目を迎える歴史と伝統のある学校である。全校生徒は197名で特別支援学級を含む計8クラスの小規模校である。卒業生の中には、東京オリンピックで金メダルを獲得した柔道の新井千鶴さんやリオデジャネイロオリンピックで活躍した陸上長距離・マラソン選手の設楽悠太さんがいる。

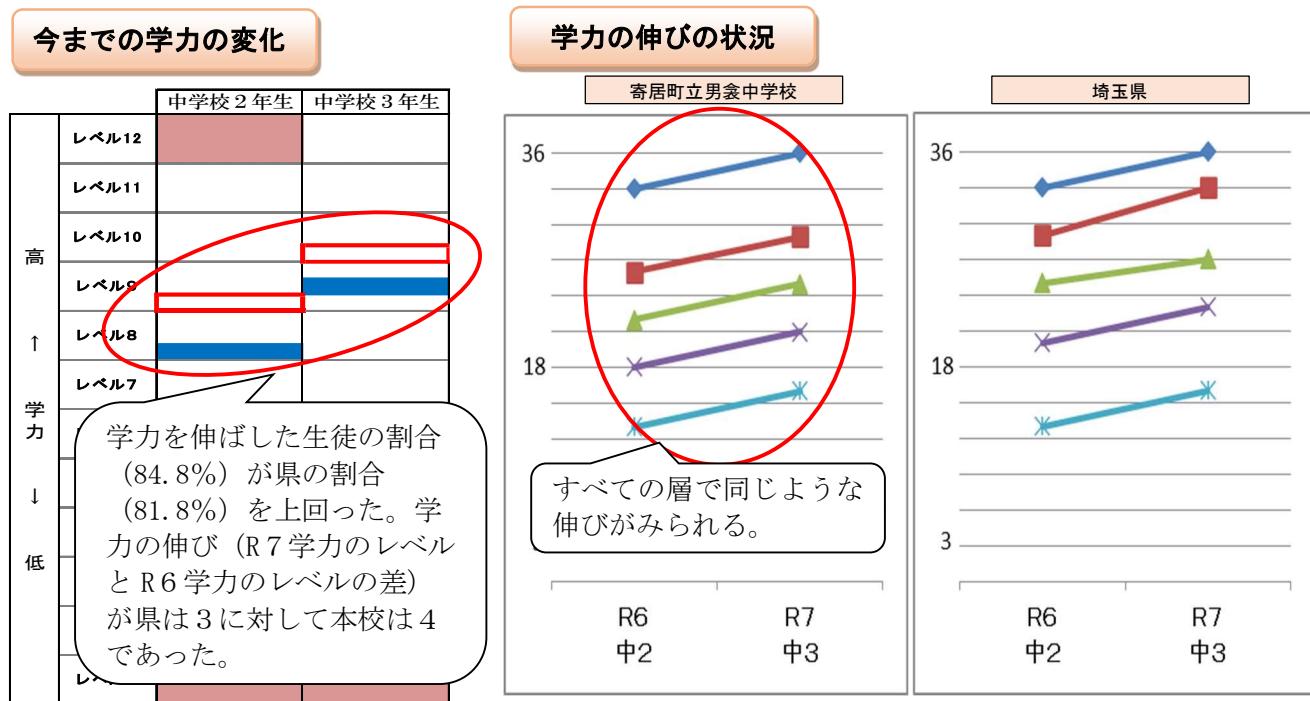


本校では、「誰一人取り残さない、個別最適な学びの構築～「探究と協働」による深い学びから、学力の向上を図る～」を学校研究課題とし、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を推進し、主体的・対話的で深い学びの視点から学校をあげて、授業改善に取り組んでいる。また、隣接する男衾小学校との9年間を見通した小中一貫教育に力を注ぐとともに、令和4年度から令和6年度にかけて文部科学省の教育課程実践検証協力校として「探究と協働」をテーマに総合的な学習の時間の研究を行っている。

2 令和6・7年度の結果

中学校2年生→中学校3年生の取組【英語】

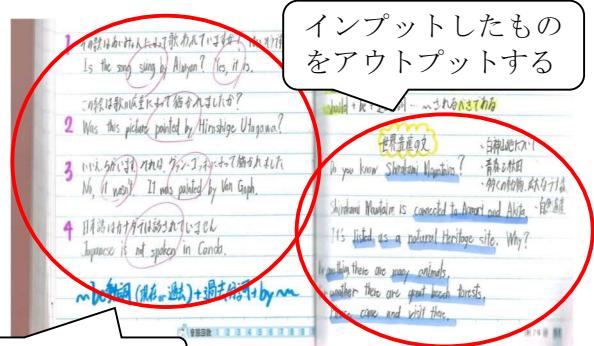
(1) 学力の伸びから見られる特徴



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 毎時間の帯活動におけるインプットと単元末におけるアウトプットの徹底

英語科では、生きて働く知識・技能の獲得のために、毎時間の帯活動でインプットする活動を欠かすことなく実践している。加えて、単元の終わりにはアウトプットする活動を実施している。インプットするときには、ただ暗記させていくだけではなく、目的、場面、状況を明確にし、「生徒の思い」や「考え」を伝えることができるよう、毎時間指導している。



帯活動におけるインプット

イ 《個別》、《協働》、《一斉》、《ペア》指導が効果的に組み合わされた単元計画

英語科では、《個別》、《協働》、《一斉》、《ペア》を効果的に組み合わせた単元計画を作成し、授業実践している。単元の目標を達成するために、一人一人異なる子供の学びの過程を見通して、全ての子供が単元の目標を達成できるよう、全体に指導する場面、協働が必要な場面、個別に学習を進める場面を効果的に組み合わせて単元を設計している。

《個別》



《協働》



《一斉》



《ペア》



ウ 学習方略や非認知能力に関するこ

英語科では、タブレット等のICT機器を用いて、子供たち一人一人の特性や学習進度にあわせて、効果的な指導を行っている。《個別》で学ぶ学習時間を各単元中に設定し、学習アプリを用いて、一人一人に最適な学習課題に取り組ませている。生徒は、難易度を自分に合わせて柔軟に変更していくので、苦手としているところ、さらに伸ばしていきたいところなど重点的に学習することができる。



学校全体での取組

(1) 異学年集団、地域人材等との協働による総合的な学習の時間における探究的な学び

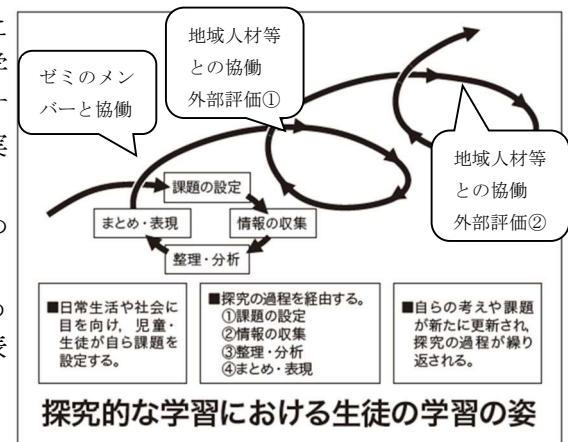
本校では、学校全体で、学年や学級の枠を取り払った集団の縦割りグループを編成してゼミ形式で総合的な学習の時間における探究学習を実施している。その際にすべてのゼミで次のようなプロセスで共通理解を図り、実践している。

- ①体験活動などを通じて課題を設定し、課題意識をもつ
- ②必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

その際に、地域人材、行政職員、専門家等による外部評価をきっかけとして生徒が新たな視点で考えられるよう、指導を工夫している。課題を立て、よりよい解決にむけて主体的に取り組む態度を育成し、一人だけでは成し遂げられない課題を異学年の生徒、地域人材、関係機関と協働することで課題解決への糸口をつかみやすくなる。他者と協働し、異なる意見を生かして、新たな知を創造しようとする態度、課題解決に向けて必要な知識・技能及び、思考力・判断力・表現力を学校全体で育成している。

(2) 男衾中スタンダードの活用

男衾中学校では、全職員がすべての授業で男衾中スタンダードを活用し、授業実践を行っている。生徒と学習過程、課題、学習形態等を共有することにより、生徒が安心して学べる授業づくりを行っている。どの授業も大枠の流れから外れることがないので、全職員が実践することにより誰一人取り残さない、個別最適な学びの構築の核になっている。



寄居町の子育て支援課の人とお話しして、私たちには何ができるのかを深く考えることができました。また、異学年と班とくんだことなど、ちやうだん意見を知ることで自分がほかに良かったです。寄居町の地域の人々意見も聞いてから良いなと思ったと感じました。
(生徒の振り返りより)

男衾中スタンダード

習得	基礎基本を覚える	個人	自分で課題に向き合う
活用	学んだことを使って学習する	対話	グループで課題に取り組む
探究	課題に対して深く追求	深める	学習をしたことを深掘りする
課題	今日の授業のねらい	個別	学習形態を選択 ①個人②先生③グループ
見通し	今日の授業の流れや単元全体の計画	まとめ	わかったこと・できるようになったことを振り返る



宮代町立百間中学校の取組

1 本校の概要

本校は生徒数 439 名、特別支援学級を含む 14 学級の学校である。学区内に東武動物公園駅があり、利便性と自然が調和した環境にある。

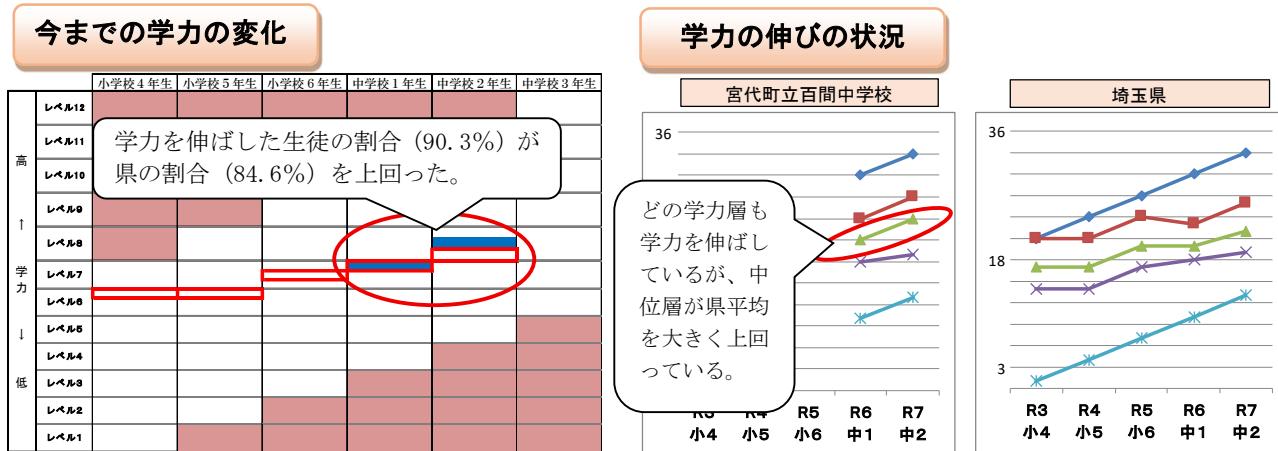
本校は、目指す学校像として「逞しく優しい生徒が育つ『生き方』が身につく学校～人と人の間にに入る「人間力」のある生徒の育成～」を掲げ、生き方教育を基盤とした「深い学び」が体感できる授業による学力向上を目指し、教育活動に取り組んでいる。



2 令和6・7年度の結果

中学校1年生→中学校2年生の取組

(1) 学力の伸びから見られる特徴【国語】



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 「知識・技能」「思考・判断・表現」の領域に関する指導について

- 前年度の埼玉県学力・学習状況調査の結果を受け、正答率が低かった情報の扱い方や歴史的仮名遣いについて、積極的な I C T 活用や、帯单元での小テストやクイズ形式による出題の繰り返しにより、知識の定着を図った。
- 読解力と表現力を向上させるため、「文章構成や文章表現の特徴について学習した事項を生かして説明文を書く」等の活動を意図的に取り入れた。
- 表現活動を充実させるため、班での話合い活動やペアワークにおいて、テーマや話合いの手順及びポイントを明確にした。鑑賞や相互評価の場面では、既習事項を評価の観点として取り組むことで、学習の深化を図った。結果、生徒質問調査で「話合いで課題を解決した(52)」「自分の考えをしっかりとてるようになった(53)」「自分の考え方方が変わったり、深まったりした(54)」等の項目において、「よくあった」が県の回答率を上回った一因と考察する。



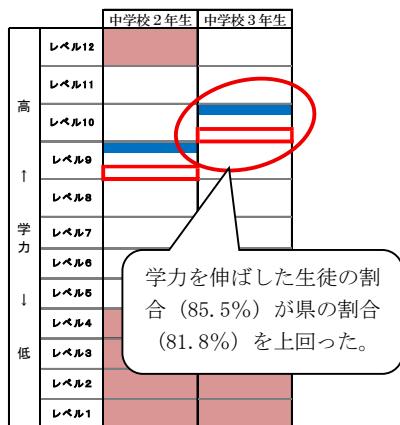
イ 学習方略や非認知能力に関するここと

授業の振り返りの場面で「できた」ことだけではなく、学習過程で気付いたことや疑問に思ったことについて積極的に書くことを指導した。結果、生徒質問調査で「授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながった(56)」「自分がわからなかつたことやわからなかつたことを自覚した(58)」の項目において、「よくあった」が県の回答率を上回った一因と考察する。

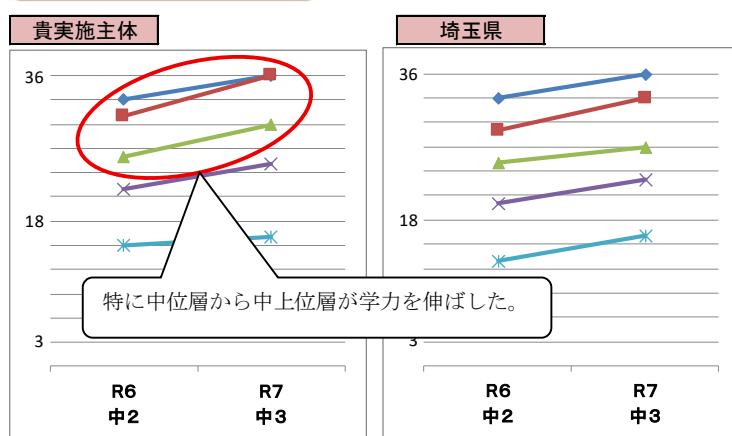
中学校2年生→中学校3年生の取組

(1) 学力の伸びから見られる特徴【英語】

今までの学力の変化



学力の伸びの状況



(2) 伸びを引き出した効果的な取組

ア 「知識・技能」、「読むこと」「書くこと」「話すこと」に関する指導について

- 単元ごとに新出の単語やフレーズについて小テストやICTを活用したクイズ形式の問題を繰り返し行い、知識の定着を図った。また、家庭学習の充実のために週末に課題を提示したり、学習用プリントを希望者へ提供したりしている（約7割の生徒が活用）。
- 「読むこと」「話すこと」の技能を向上させるため、次の流れをルーティーン化した。
①デジタル教科書で発音を確認しながら各個人で音読
②学力を考慮した意図的な英語用ペアでの相互練習
③単元最後のALTによる各生徒の音読チェック
④各生徒が音読した内容の要旨についてのALTによる英語でのリテリング
- 表現力を向上させるため、月1回、日常生活や学校行事に関連付けたレポートを作成するという学習活動に取り組んだり、場面や対象者を明確に設定した上のプレゼンテーションを個人・グループで作成したりした。

イ 学習方略や非認知能力に関するこ

- 振り返りシートにおいて、授業ごとだけでなく、単元全体を振り返る記入欄を設け、文型について理解したことをまとめたり、前単元との比較をすることで自分の理解度を確認したりする指導を行った。また、次単元への目標を記入し、見通しをもって学習する姿勢の育成を図った。結果、生徒質問調査の「認知的方略」「プランニング方略」の項目において「よくあった」が県の回答率を上回った一因と考察する。

◎考え方など、何を学んで、どのように伸びたか、どんなときに何を学んだ基礎知識を使える?また、何をもう一度やさしく教えてもらいたい。
毎回同じことをやることはいいけれど、違うことをやることで、より深い理解ができるのではないか。
入門に出る単語のミス率を下げるためには、(1)単語の意味を理解する。(2)単語の読み方を覚える。(3)単語の文脈で使う。

前単元と比較し、何が表現できるようになつたかについて記入する生徒が多い。

学校全体での取組

(1) 德・知・体による「生き方教育」の充実

- 道徳推進教師を中心にして、学年職員による道徳担任制、外部指導者を招聘しての校内研修会の実施等、「考え、議論する道徳科」の充実に取り組んだ。
- きめ細やかで、積極的な生徒指導・教育相談体制を構築し、生徒の「良さ」を認め、自己肯定感を高める指導の工夫に取り組んだ。

(2) 指導力の向上について

- 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」を図るために、研修主任を中心として、相互授業参観による教員同士の学び合いや、デジタルとアナログのそれぞれの利点を生かした効果的な指導方法の共有に取り組み、学校全体として9教科で指導力の向上に取り組んだ。
- 校長が県学調及び全国学調の結果を踏まえ、各主任や教科担当と具体的な面談を行い、学校・学年、教科の指導力向上に努めた。